

『医療政策学校』No.2 (本の泉社、2006年5月)に
掲載(32-33頁)。2006年3月30日(木):脱稿・送
稿。4月14日(金)校了。本文:1,948字。

社会科学的認識との出会い

——学生時代の読書の思い出——

垣田裕介

ここでは、私が学部学生時代(1994~97年度)に
経験した「社会科学的認識との出会い」について、
そのキッカケとなった思い出深い本を取り上げ、エ
ピソードを交えて紹介します。

私が学生時代に所属していたのは、同志社大学の
文学部社会学科に設けられていた産業関係学専攻と
いうコースでした。文学部であり、また社会学科で
ありながら、このコースの講義科目の主なバックグ
ラウンドは経済学でした。

3年次以降にゼミや専門的講義を受けるなかで、
いわゆる「企業社会」における労働実態や生活問題
に関心をもつようになりました。3年次後期の履修
科目で課された「研究論文」では、そうした題材を
取り上げました。その課題を仕上げる過程で、私は、
読書や勉強成果の整理の楽しさを知りました。また、
4年次の卒業論文では、イギリス社会政策史に関す
る勉強の成果をまとめました。

このように、私は3年次の頃から社会科学に関す
る読書や勉強が面白くなり、結果として、社会福祉
系の大学院へ進学し、大学での教育・研究職に就く

ことになりました。こうした進路やこれまでの勉
強・研究のテーマは、学生時代に感銘を受けた以下
の本と深く関わっているように思います。これらの
本は、気取っていえば、私の進路や勉強・研究にと
つての原点となっています。

* * *

1. F・エンゲルス著『イギリスにおける労働者階級の状態』岩波文庫など。原著:1845年。

2年次の夏休みにレポート課題図書として指定さ
れ、本書を手に取りることになりました。そうした経
緯で本書を半ば受動的に手にしたとはいえ、19世紀
イギリスの労働者の貧困や都市の衛生状態につい
ての、臨場感と迫力にあふれるルポルタージュには大
いに引き込まれました。この読書経験は、私のその
後の読書や勉強・研究の出発点になっているように
思います。

2. 暉峻淑子『豊かさとは何か』岩波新書、1989年。

先述した3年次の「研究論文」において、企業労
働や生活問題を取り上げた際に、本書を参考にして
勉強しました。

本書によって私は、労働と生活を結びつけて考
えることの重要性、そして生活や福祉について考
える際には労働のありようを視野に入れる必要のある
ことを学びました。今でもこの点は、社会福祉を勉強・
研究するうえで決定的に重要であると考えています。

また本書によって、本を読むことで以前とは違
った角度や視点で社会をみることができると痛感
しました。そして、読み出したら止まらないという
興奮を覚えた、思い出の一冊です。

3. 内田義彦『読書と社会科学』岩波新書、1985年。

3年次にゼミの担当教員から薦められ、その後も

繰り返し読み続けています。なかでも、「概念」という（私にとっては今でも難解な）コトバを理解するために、何度も読み返しました。本書は、平易な文体で書かれているため読みやすく、そして何より味わいのある内容です。読み返すごとに新たに気づかされたり、あらためて確認させられる点も少なくありません。

4. K・マルクス著『賃労働と資本』岩波文庫など。

原著初版：1849年。

4年次に、内定先の企業への就職か、大学院進学への進路変更か、と悩んでいた時に読み、大いに感銘を受けた一冊。当時挑戦していた『資本論』とは異なり、入門的な本書は一日で読了でき、資本主義経済・社会の仕組みについて、もっと勉強したいと思うようになりました。

ちなみに、私が大学院進学を考えるようになったのは、4年次の6月に第一志望企業への就職が内定した翌週に、当時モグリ聴講で参加していたゼミで、大阪の釜ヶ崎を初めて訪れたことがキッカケになっています。このときに、衣食住に事欠く貧困・窮乏状態を目の当たりにしたことによって、私は大いに衝撃を受け、貧困問題や経済・社会についての勉学意欲を増幅させられました。そして結局、企業への就職を取り止めて大学院への進学を決意し、本格的に貧困や福祉政策に関する調査研究に携わることになりました。

5. 吉野源三郎『君たちはどう生きるか』岩波文庫、1982年。初版：新潮社、1937年。

本書を初めて読んだのは大学院生時代ですが、大いに感銘を受け、以後つねに座右に置き続けている一冊なので、ここで紹介することにします。本書は、中学生「コペル君」を主人公として、人生を「どう生きるか」という問いを社会科学的認識のあり方と

結び付けて書かれた物語です。「人生読本」かつ社会科学入門書として、これまで私が周囲に薦めてきた一冊です。

* * *

以上のように、学生時代に、ここで紹介した本を始めとする社会科学書によって唯物論や政治経済学的視点にふれたことは、観念的な「あるべき」論に終始しない社会福祉の教育・研究を進めるためにも、私にとって決定的に重要な経験であったといえます。

(かきた・ゆうすけ／大分大学・講師)